

〔一般論文〕

検定試験に見るテストと C E F R との接続

— 日本中国語検定の指定作文を中心に —

張 勤

1. はじめに

日本中国語検定試験¹（以下、中検）は Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment（以下、C E F R）² が共通参照レベルとして提示される「書くこと」の例示的能力記述文内容への接続に対応するために、2020 年 6 月 103 回の試験より 2 級以上の級に指定テーマ・指定語句作文（以下、指定作文）が課されることになった。本論では、この指定作文が導入される背景を確認した上で、指定作文の難易度を分析し、指定作文がこういった能力を測るものとしての役割を果たしているのか、当初の目的である C E F R への対応のあり方を明らかにしていく。

また「複言語主義」、「行動中心主義」といった教育理念と内容を中心とする C E F R の評価内容に、それとは異なる外国語教育理念や方法によって外国語教育をサポートしてきた検定試験を対応させる、そもそもその可能性と合理性も窺ってみたいものである。

2. 外国語教育のグローバル化と C E F R

2.1 グローバル化が進むのに伴い、外国語学習の環境において質的な変化が起き、学習と教育方法にも根本的な変革が求められるようになった。

まず何よりも人や物の往来と移動がこれまでになく盛んになったことにより、異なる言語を母語とする同士が直接交流できる機会を容易に得られるようになっただけでなく、以前と比較することができないほど容易に母語と異なる言語の地域の間を行き来することができるようになってきた。この変化は取りも直さず机上の教科書や辞書だけが知識源ではなくなり、映画やビデオだけでしか「外人」を観察できないことがなくなり、生の外国語とその言語を母語とする人々に頻繁に接することができるようになったということである。生きた外国語とその言語を操る者が重要な知識源の一つとなり、いわゆる異文化がより身近なものとなり、異なる文化と価値観への理解など多様性への対応も外国語学習と教育において大きなウェットを占めるようになったのである。

上述の変遷と相まって、外国語学習と教育が目指すのも、単なる単語や文法などの言語スキルを覚えて原著や資料が読める、映画を見るなど、いわゆる教養だけでなく、その上に異文化理解にも焦点を当てるべく、異文化間コミュニケーションのスキルが求められ、国際ビジネスや文化交流を通じて、世界的な課題に向けて異なる文化を背景に持つ同士が協力して取り込む、ということが加わってきた。

グローバル化が進むのに伴われ、外国語学習にも環境変化が起き、学習リソースと学習形態の多様化がもたらされた。インターネットの普及により、外国語学習に関する情報や学習リソースへのアクセスが格段に向上し、オンライン言語学習プラットフォーム、または言語学習アプリなどが広く利用できるようになった。グローバル化の中で生まれる多様で忙しい

生活様式から求められる柔軟で効果的な学習方法として動画、オーディオ、対話型コンテンツが凄まじいスピードで数えきれないほど現れ、それらを活用した学習が教室での学習を凌駕するほど一般化した。

2.2 CEFR はまさにこのようなグローバル化の背景において開発・制定されたものである。EU 統合のプロセスにおいて、各国の権限を認めながら、経済政策、外交政策、司法協力の3つを柱として加盟国間で協調・調和ある発展の実現を目指していくが、それにともなってEU 域内のヒト・モノ・カネの動きの活発化がもたらされ、特にコミュニケーションが以前に増して重要なポイントとなり、また、EU 域内の相互理解と交流のためにも、母語以外の言葉の能力を必要なレベルで身につけることがEU 域内の人々に求められるようになった。欧州評議会によって進められた「ヨーロッパ市民のための言語学習」プロジェクトにおいて、単一言語ではなく、ヨーロッパのすべての言語に同じ基準で適用できるような学習状況の評価や指導といったことにおける方法を提供することを目的とするCEFR が中心的な役割となった。

多言語環境において外国語運用能力を測るための基準を提供するCEFR は学習または使用をされる個々の言語を孤立したものとして見るのではなく、個人の言語体験に位置づけられ、今までの個人の言語知識と社会経験のすべてが相互に作用しながら、相互補完的に行われるものであり、言語の教育と学習はこういった個人にある母語を含めた複数の言語のリソースを増やし、複言語能力を伸ばすものだという複言語主義と複文化主義の概念を同時に提唱している。母語の存在ということ、また以上見てきたグローバル化が進み、さまざまな外国語とその言語が使われる地域の様子・文化がさまざまなメディアを通して絶え間なく拡散されるという今日においては、複言語主義と複文化主義の考えに従う外国語の学習と教育は求められていく方向であろう。

CEFR はヨーロッパの言語に同じ基準を提供しているが、その枠組み

と発想はすべての言語に応用できるものである。C E F R の行動中心主義を強調するが故に、実用性に傾く教育理念や、ヨーロッパの言語を中心に考えられた複言語主義がアジア・日本の言語状況と受容との整合性などにおいて多くの議論がまだ残っているが、日本でも教育現場で入学試験や科目レベル設定の目安としても用いられつつあり、また NHK の外国語講座も C E F R の基準で講座のレベルの目安を示すのに利用している。日本の英語検定試験等は C E F R をいち早く基準として導入しており、議論が更に活発となっていくと考えられる。

3 日本中国語検定試験

3.1 一方、このように変る学習と教育の環境において学習と教育をサポートする仕組みとしての中検はどのように変化を迎えたのであろうか。

1981年に第1回「中国語学力認定試験」を実施して「中国語学力認定協会」として発足した「日本中国語検定協会」(1985年改名)は現在までに110回の試験が行われてきた。中検は日本語を母語とする中国語学習者向けという方針のもとに、基本的に語学教室で行われるオーソドックスな試験形式と同じで、リスニング・筆記の問題が備えられているが、特に翻訳と作文の問題が取り入られており、中国語の到達度を確認するとともに、日本語を介した「訳す能力」と「書く能力」も測るという仕組みになっている。言わば、日本語のネイティブスピーカーの中国語運用能力を四技能〔リスニング、(通訳も兼ねる)スピーキング、リーディング、(通訳も兼ねる)ライティング〕より測る検定試験である。

コミュニケーションや実務に使う外国語としての中国語を学習する際に、まずは基本として母語の日本語と外国語の中国語の間を正確に行き来できるという目標が求められる。中検においてこの「訳す能力」が特に重要視され、それを測るための問題が一次筆記試験、二次面接試験などさま

ざまな形式に織り込まれていることから、まさにC E F Rの複言語能力の考えが試験において具現化していると言えよう。

その後、1級試験に課している面接試験が準1級にも拡大し、通訳のみならず指定テーマに関するスピーチ問題が追加された。また「書く能力」を測る延長線上にC E F Rにおいて求められる「書くこと」の力を測る内容を強化すべく、2級より上の級の筆記試験においてもテーマ指定の作文問題、指定作文が追加された。

以上のような変遷と試験問題の整備を経て、中検はC E F Rに対応・接続すると表明されている³。

4 中検の指定作文

4.1 中検の指定作文は1級・準1級・2級・3級・4級・準4級の六つの級のうち、1級・準1級・2級の筆記問題の一問として最後の翻訳・作文問題に組まれているものである。問題は与えられた語句を使い、指定の字数で関連性のある一段落の作文を書くというものであり、配置は以下の通りである。

	指定単語数	求める字数（句読点を含む）	配点
1級	5（3つ以上使用）	90-120	8
準1級	3	50-80	8
2級	2	30-50	6

110回（2023年11月実施）に実際出題されている問題でその形式を確認すると次のようになっている⁴。

1 級	「友達」について、次の 5 つの語句の中から 3 つ以上を使用して 90 字以上 120 字以内で書きなさい。(使用した語句には下線を引くこと。) “信任” “帮助” “理解” “关心” “鼓励” ※句読点も 1 字と数えます。文頭を 2 マス空ける必要はありません。
準 1 級	「公共交通」について、次の 3 つの語句をすべて使用して 50 字以上 80 字以内で書きなさい。(使用した 3 つの語句には下線を引くこと。) “提供” “安全” “利用” ※句読点も 1 字と数えます。文頭を 2 マス空ける必要はありません。
2 級	「わたしの中国語学習の秘訣」について、次の 2 つの語句を使用して 30 字以上 50 字以内で書きなさい。(使用した 2 つの語句には下線を引くこと。) “经常” “觉得” ※句読点も 1 字と数えます。文頭を 2 マス空ける必要はありません。

4.2 2020 年 6 月に実施される 103 回試験より、1 級は計 3 題（1 級試験は 11 月にのみ実施）、準 1 級と 2 級はともに計 8 題が出題され、2024 年 2 月現在まで以下の内容で全部 19 題実施されている。

回	級	テーマ	語句
103	準 1 級	車の自動運転	人工智能・挑战・前途无量
	2 級	日本の四季	凉爽・喜欢
104	1 級	女性と現代社会	平等・特长・能力・参与・机会
	準 1 級	環境保護	低碳・绿色・公共交通
	2 級	わたしの趣味	喜欢・偶尔
105	準 1 級	幸せ	追求・理解・只要…就…
	2 級	中国語を学ぶ目的	感兴趣・为了
106	準 1 級	グローバル化	跨文化・障碍・协助
	2 級	故郷	风景・想念
107	1 級	余暇の過ごし方	读书・社交软件・睡懒觉・家务・运动
	準 1 級	育児	关心・休假・社会
	2 級	自分の将来の夢	理想・文化
108	準 1 級	読書	知识・人生・丰富
	2 級	携帯電話	功能・方便

109	準1級	カルチャーショック	价值观・困惑・多元化
	2級	わたしの小学生時代	好奇・经常
110	1級	友達	信任・帮助・理解・关心・鼓励
	準1級	公共交通	提供・安全・利用
	2級	わたしの中国語学習の秘訣	经常・觉得

4.3 多岐に渡る内容で出題されている指定テーマを、外国語学習の観点から、より日常的な語句での作文が可能な「具体性を持つ説明タイプ」と、より高度で抽象的な語句での作文が求められる「論述性を持つ評論タイプ」との二種に分類することができよう。

与えられたテーマについて、どういう内容でどのように展開していくか、を考える際に、説明タイプの問題も評論タイプの問題も、想像力と思考力が必要だが、説明タイプのほうがよりイメージが膨らみやすいことは否めない。

また作文をする際、説明タイプは、出来事や事柄、社会事象を叙述する具体性を持つので、学習の初期段階で獲得している基礎語彙、基礎文法や構文知識が問題を解くスキルの中心となるのに対して、評論タイプは、出来事や事柄、または社会事象に対して、意見や考え、見方を論述しなければならないので、学習の初期段階で獲得した基礎語彙、文法や構文知識の上に、更に正確に意見をまとめて表す語彙量、複雑な考えを表すためのより高度な複文運用能力も問題を解くスキルとなってくる。この意味で言うと、評論タイプは説明タイプと比較すると、相対的に難しさが増してくるものである。下は1級に出題される評論タイプと説明タイプの事例だが、中国語の解答例はいずれも中検が公表しているものである⁵。

タイプ	評論タイプ	説明タイプ
回	104 回	107 回
テーマ	女性と現代社会	余暇の過ごし方
指定語句：5 (三つ以上使うこと)	平等・特长・能力・参与・机会	读书・社交软件・睡懒觉・家务・运动
解答例	<p>现在，很多国家都在大力提倡男女平等，从制度上保证女性参与社会活动的机会。这绝不是男性对女性施舍恩惠！我们必须清醒地认识到只有充分发挥女性的特长和创造能力，我们的社会才能不断地健康发展。</p>	<p>近年来，人们的业余生活跟以前有了很大的不同，除了传统的读书和户外运动以外，不少人还利用手机或电脑阅读电子书籍；花钱去健身房锻炼身体的人也越来越多。还有一个现象，就是不少人跟自己的好朋友从未见过面，因为他们是通过社交软件认识并交流的。</p>

上例の通り、作文内容を想定することから実際必要な中国語のスキルまでどちらも評論タイプがその難しさを呈している。指定語句が実質ある種話題提供的な役割を果たしているが、「女性と現代社会」の題では、さまざまな方向へ展開される可能性がある中で、それらを取捨選択して指定語句内でいくつかのセンテンスを有機的に繋いで自然な起承転結を持つまとまった作文の内容を試験中に短い時間にまとめるのに相当な思考力が必要であり、その上に中国語の文章にしていけるには更に高度で熟練したスキルが必要となってくる。上の実例では「現状の確認（现在，很多国家都在大力提倡男女平等，从制度上保证女性参与社会活动的机会。）——評価（这绝不是男性对女性施舍恩惠！）——評価に対する理由づけ（我们必须清醒地认识到只有充分发挥女性的特长和创造能力，我们的社会才能不断地健康发展。）」のように論理的に展開しており、更に、次のように非常に複雑で高度な構文が用いられている。

目的後置文（行為）现在，很多国家都在大力提倡男女平等，（目的）从制度上保证女性参与社会活动的机会。

複雑な埋め込み文 我们必须清醒地认识到 〔只有〕充分发挥女性的特长

和创造能力, 我们的社会「才能」不断地健康发展。

ところが、説明タイプの「余暇の過ごし方」の題は、基本的に社会事象をなぞるだけで問題をクリアすることができるので、「女性と現代社会」の題と比較すれば、難易度がぐんと下がってしまう。

もっともここで留意しなければならないのは指定語句の存在である。語句によってはテーマの性質が変わる可能性があるのである。例えば、105回準1級に出題される「幸せ」という評論タイプの題は指定語句「追求・理解・只要…就…」においては、完全に論理性を持つ作文しかできなくなってしまうが、しかしながらももしも指定語句が「姐姐・结婚・阻碍」のような具体化し得る語句なら、内容が具体化された説明タイプの作文が可能となる。与えられるテーマと指定語句の両方で作文の性質が決まるのである。

4.4 これまで実施された19題の指定作文を、説明タイプと評論タイプに分けると次のようになる。

	説明タイプ	評論タイプ
1 級	余暇の過ごし方(读书・社交软件・睡眠覚・家务・运动) 107 回	女性と現代社会(平等・特长・能力・参与・机会) 104 回 友達(信任・帮助・理解・关心・鼓励) 110 回
準 1 級	車の自動運転(人工智能・挑战・前途无量) 103 回 環境保護(低碳・绿色・公共交通) 104 回 公共交通(提供・安全・利用) 110 回	幸せ(追求・理解・只要…就…) 105 回 グローバル化(跨文化・障碍・协助) 106 回 育児(关心・休假・社会) 107 回 読書(知识・人生・丰富) 108 回 カルチャーショック(价值观・困惑・多元化) 109 回
2 級	日本の四季(凉爽・喜欢) 103 回 わたしの趣味(喜欢・偶尔) 104 回 中国語を学ぶ目的(感兴趣・为了) 105 回 故郷(风景・想念) 106 回	

	自分の将来の夢(理想・文化) 107 回 携帯電話(機能・方便) 108 回 わたしの小学生時代(好奇・经常) 109 回 わたしの中国語学習の秘訣(经常・ 觉得) 110 回	
--	---	--

上の表で示されているように、上の級になるほど、難しい評論タイプの割合が増え、下の2級に至ってはすべて説明タイプとなる。この作文タイプの割合からは、作文タイプの難易度が級のレベルに平行しており、級レベル相当の作文内容展開スキル及び作文を完成させるための語彙、文法、構文知識が求められていることが言えよう。

4.5 一般的に言うと、国語の力の中でテーマ指定の小論文作文はかなり高度なものである。その上に字数の指定があればさらに難しさが増していく。外国語であれば、その言語での言い回しや表現パターンを十分に把握していなければ、言いたいことを自分のできる表現で遠回しに言ったり、きっちりした文章語ではなく、冗長な話しことばでカバーしたりすることで問題を攻めていくことになるが、そのためには字数が多いほど余裕が持てる。特に中検の指定作文は、1級は90字～120字、準1級は50字～80字、2級なら30字～50字しかなく、これぐらいの字数による指定作文は、ネーティブでも推敲して、字数と内容展開を指定内容に合わせる事が難しい。そういう意味で言うと、確かに作文を長くするのにより多くの語彙量、より多く複雑な構文を知っている必要があるが、作文するのに要する時間を考慮に入れなければ、テーマの内容に関わらず、要求する字数が多いほど、問題としては易しくなることになる。これは評論タイプと説明タイプのどちらについても言えよう。

さらに指定語句数対字数の割合も問題の難易度に深く関係している。1級のほうは最長120字に対して(5つから選ぶ)3つの指定語句なので、平均40字1指定語句となり、もっとも自由度が高い。次に準1級は同じ

3つの指定語句だが、最長80字しかなく、平均26.5字1指定語句となるので、1級の40字1指定語句と比較すれば相当きつい問題となっている。さらに2級になると、指定語句が二つで、最長50字なので、平均25字1字指定語句となり、準1級とほぼ同じレベルである。

1 級	準 1 級	2 級
1 指定語句／40 字	1 指定語句／26.5 字	1 指定語句／25 字

以下のように説明タイプで3つの級を比較すると、やはり字数の要求がもっとも多い1級のほうがより「遊び」の部分が多くなり、ある種の余裕が持てることになるのに対して、2級はほぼきっちり作文の内容を考えておかないと作文が始まらない相当窮屈できつい試験問題となっている。

1 級 (90 字以上 120 字以内)

(107 回) 余暇の過ごし方 指定語句: (三つ以上使うこと) 读书・社交软件・睡懒觉・家务・运动

近年来, 人们的业余生活跟以前有了很大的不同, 除了传统的读书和户外运动以外, 不少人还利用手机或电脑阅读电子书籍; 花钱去健身房锻炼身体的人也越来越多。还有一个现象, 就是不少人跟自己的好朋友从未见过面, 因为他们是通过社交软件认识并交流的。

準 1 級 (50 字以上 80 字以内)

(110 回) 公共交通 指定語句: (すべて使うこと) 提供・安全・利用

现在人们利用飞机, 高铁等公共交通工具出差, 旅行已经成为常态。而公共交通的运营部门, 在重视经济效益的同时, 也必须考虑如何为利用者提供更加便捷, 更加安全的服务。

2 級 (30 字以上 50 字以内)

(105 回) 中国語を学ぶ目的 指定語句: (すべて使うこと) 感兴趣・为了

中国是一个文明古国，我对中国历史很感兴趣，我学习汉语的目的是为了更好地了解中国历史。

4.6 1級問題は指定語句を5つから3つを選ぶことができることも易さをさらなるものにしてしまうと考えられる。例えば、「女性と現代社会」(104回)に指定される「平等・特长・能力・参与・机会」にしても、「余暇の過ごし方」(107回)に指定される「读书・社交软件・睡懒觉・家务・运动」にしても、すべての語句の意味が指定テーマの内容に沿っており、自由に3つ選ぶことができるとなれば、作文の内容をより広く自由に考えられ、受験者の得意な話題、使いこなせている構文や語彙を選ぶことができる。この限りで言えば、級ごとに使用する指定語句の難しさこそ違いがあるものの、もっとも長い字数を要求する1級の作文問題はもっとも易しくなり、準1級と2級は同じ難易度にあると言うことが言える。

4.7 このように、絶対的な難易度という視点から指定作文は次のようなあり方になっているということがいえるのではなかろうか。

	易 ←————→ 難	
作文タイプ	説明タイプ (2級ほど多い)	評論タイプ (1級中心)
指定語句対字数の割合	大きい (1級)	小さい (準1級・2級)
指定語句の選択	可能 (1級)	不可 (準1級・2級)

作文タイプにおいては、2級は説明タイプが多く、相対的に易しいが、字数と指定語句の選択可否においては逆に1級が相対的に易しくなり、準1級がほぼその中間に位置するということになろう。

5 検定試験としての指定作文

5.1 指定作文は、検定試験の一問としてどのような効果を狙っているの
であろうか。言い換えれば、CEFRの「書くこと」の力に対応するよう
に設計され、導入されたものだが、「書くこと」のどの側面をテストとし
て狙っているのであろうか。

指定作文は多岐にわたる内容で出題されるが、そのテーマを整理すると
次のようになろう⁶。

種類	説明タイプ	評論タイプ
個人	わたしの趣味（喜欢・偶尔）104回、2級 中国語を学ぶ目的（感兴趣・为了）105回、2級 故郷（风景・想念）106回、2級 自分の将来の夢（理想・文化）107回、2級 わたしの小学生時代（好奇・经常）109回、2級 わたしの中国語学習の秘訣（经常・觉得）110回、2級	
社会	公共交通（提供・安全・利用）110回、準1級	女性と現代社会（平等・特长・能力・参与・机会）104回、1級 グローバル化（跨文化・障碍・协助）106回、準1級
交際		友達（信任・帮助・理解・关心・鼓励）110回、1級
家庭		育児（关心・休假・社会）107回、準1級
科学技術	携帯電話（功能・方便）108回、2級 車の自動運転（人工智能・挑战・前途无量）103回、準1級 環境保護（低碳・绿色・公共交通）104回、準1級	

価値観		幸せ（追求・理解・只要…就…） 105回、準1級
文化		カルチャーショック（価値観・困惑・多元化）109回、準1級
自然	日本の四季（凉爽・喜欢）103回、 2級	
レジャー	余暇の過ごし方（读书・社交软件・ 睡眠覚・家务・运动）107回、1 級	読書（知识・人生・丰富）108回、 準1級

全部で9種類のジャンルから指定テーマが出題されるが、その中で2級は個人にまつわるテーマが中心となり、1級と準1級がさまざまなテーマに散らばっているというあり方である。

5.2 さらに1級～2級までの認定基準については中検 HP によると以下のように設定されている⁷。

	1級	準1級	2級
認定基準	高いレベルで中国語を駆使しうる能力の保証 高度な読解力・表現力を有し、複雑な中国語及び日本語（あいさつ、講演、会議、会談等）の翻訳・通訳ができる。	実務に即従事しうる能力の保証（全般的事項のマスター） 社会生活に必要な中国語を基本的に習得し、通常の文章の中国語訳・日本語訳、簡単な通訳ができる。	実務能力の基礎づくり完成の保証 複文を含むやや高度な中国語の文章を読み、3級程度の文章を書くことができる。 日常的な話題での会話が行える。

2020年より実施が始まってから1級はまだ3回しか実施していないので、客観的に評価するのにデータがまだ不足する嫌いが無きしもあらずであるが、全体から見て、1級は高度な評論タイプを中心に語学以外の見地も必要な「価値観」や「社会」についての作文が求められており、さらに指定語句こそ選択ができ、準1級と2級に比較すると推敲する余裕が持て

るものの、求められる長い字数相応の漢字が正確に書ける力・語彙力・文法または熟知した構文の知識がないと、得点が難しく、認定基準「高いレベルで中国語を駆使しうる能力の保証」に相応な問題となっている。

1級に対して、準1級は説明タイプと評論タイプが均等に配分され、テーマも易しい個人的な内容ではなく、「社会」や「文化」などさまざまなジャンルにわたって社会との関わりへの関心が求められる高度なテーマが配置されている。指定語句は1級と同じく三つ使用する必要があり、しかも選択もできないので、1級ほど推敲する余裕が持てず、作文内容構成に相当な基礎知識が必要だが、字数が少ない分、漢字のミスや文法の間違いなどにより減点される可能性が1級よりは少なくなる。その意味でいうと、1級より基礎知識が求められながら、1級よりミスの少ない作文が可能であり、「実務に即従事しうる能力の保証」という認定基準に相応しい問題である。

2級は「実務能力の基礎づくり完成の保証」という中国語の基礎力作りの認定基準に相応しく、個人の周辺のことについて叙述するテーマの説明タイプの指定作文が課される。指定語句対作文文字数の割合が準1級と同じ、推敲する余裕があまり持てず、作文内容構成をしっかりとした基礎知識でもってスピーディに行う必要があるが、日常学習に繰り返し練習しているのだろう日常生活状況の表出の延長で作文がこなせるので、2級のレベルに適切な設定だと言えよう。

5.3 以上から、指定作文は、1級においては、高い漢字力・語彙力・文法または熟練した構文の知識をすでに持っている前提で、ある程度余裕を与え、その应用能力を測ることに重きが置かれ、準1級においては、应用能力よりもやや窮屈な条件下での基礎知識全般の把握程度を測ることを目的とされ、2級においては基礎知識の応用ということに主眼がある、ということが言えるのではなかろうか。

6 C E F R への対応・接続から見る指定作文

6.1 中検は検定試験とC E F Rとの対応関係を次のように認定している⁸。

C E F R	A1	A2	B1	B2	C1	C2
中検	準4級	4級	3級	2級	準1級	1級

上の対照関係から、以上で見てきた1級～2級の指定作文はレベル的にC E F RのC2～B2にほぼ対応するということになる。

ところで、C E F RにおいてB2～C2の共通参照レベル(全体的な尺度)については次のように提示されている。対照を図るために、右側に中検のレベル認定をつけておく。

熟達した言語使用者	C2	聞いたり、読んだりしたほぼ全てのものを容易に理解することができる。 いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構成できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができ、非常に複雑な状況でも細かい意味の違い、区別を表現できる。	1級
			準1級
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる。 言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。 社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも効果的な言葉遣いができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細なテキストを作ることができる。その際テキストを構成する字句や接続表現、結束表現の用法をマスターしていることがうかがえる。	2級

自立した言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解できる。お互いに緊張しないで母語話者とやり取りができるくらい流暢かつ自然である。かなり広汎な範囲の話題について、明確で詳細なテキストを作ることができ、さまざまな選択肢について長所や短所を示しながら自己の視点を説明できる。	3 級
	B1	仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。	

指定作文に限定して見ていくと、C2 に示された例示的能力記述文の内容と以上見てきた 1 級の指定作文との間にある種の乖離が存在していることが考えられる。C2 は例えて言う、情報のカオスの中にいながら、言語使用者の熟達した言語能力で、的確に情報を整理し、理路整然且つ繊細婉曲にコミュニケーション相手とやり取りをする、といった言葉によってできることを提示している。それに対して、1 級の指定作文は、指定のテーマとしては C2 レベル的な展開が可能なものだが、指定文字数が最大でもたったの 120 字で、そのような能力を到底十分に示すことが不可能であり、結果的に C1 的なレベルの印象が与えられてしまう。

C2 ～ C1 に対応すると認定されている準 1 級は、1 級よりも字数の要求の少ないことから、C2 に対応するとされる部分は 1 級よりも C2 に相応する能力を反映するのに十分な展開ができないので、C2 レベルを評価する試験問題としての役割を果たせていない。また C1 に対応する部分も、例示的能力記述文によって提示されている、複雑な長文の理解としっかりした構造の長文の作文というレベルを反映するのに字数的には不可能である。以上のように、準 1 級のこれまで出題されているテーマは、C2 ～ C1

レベルに見合う展開が可能なものが多数あるが、やはり字数制限により、C2～C1レベルの能力を測る試験問題として不足があると言わざるを得ない。むしろ様々な内容の、そして抽象的また具体的な話題のテキストを操れるレベルのB2に近い。

以上の考えに従えば、より字が短い2級の指定作文は、字数的にもまた指定されるテーマが個人的なことについての説明タイプのものが多数なので、複雑な内容に対応しないことから現状ではC1レベルを測る試験問題としては機能しないことになる。また2級が対応するとされるB2レベルの例示的能力記述文の内容とも齟齬が見られる。専門分野の技術的な議論などの抽象的または具体的な話題を理解したり、さまざまな話題について明確で詳細な作文を作り自分意見を表したりするといったレベルはこれまで出題された2級の指定作文のテーマが想定するレベルより大幅に上回っていると言えよう。身近な話題や個人の話題を理解し、作文をすることができるB1に該当すると見たほうが合理的である。

以上、指定作文の問題形式と内容について、CEFRが提示する基本参照レベルの全体尺度との照らし合わせを行った。その結果、現状の指定作文は、字数制限（1級・準1級・2級）、または指定テーマの内容制限（2級）により、1級はC2、準1級はC1、もしくはB2、2級はB1のレベルに相当する、という分析ができた。

6.2 以下CEFRの共通参考レベル（自己評価表）に示されるC2～B2レベルの例示的能力記述に照らし合わせて、もう少し具体的に指定作文のC2～B2レベルに不足する部分を確認しておきたい。

CEFRはC2～B1の書くことによる表現力について以下のことが求められている⁹。

C2 明瞭な、流暢な文章を適切な文体で書くことができる。効果的な論理構造で事情を説明し、その重要点を読み手に気づかせ、記憶にとどめさ

せるように、複雑な内容の手紙、レポート、記事を書くことができる。仕事や文学作品の概要や評を書くことができる。

C1 適当な長さでいくつかの視点を示して、明瞭な構成で自己表現ができる。自分が重要だと思う点を強調しながら、手紙やエッセイ、レポートで複雑な主題を扱うことができる。読者を念頭に置いて適切な文体を選択できる。

B2 興味関心のある分野内なら、幅広くいろいろな話題について、明瞭で詳細な説明文を書くことができる。エッセイやレポートで情報を伝え、一定の視点に対する支持や反対の理由を書くことができる。手紙の中で、事件や体験について自分にとっての意義を中心に書くことができる。

B1 身近で個人的に関心のある話題について、つながりのあるテキストを書くことができる。私信で経験や印象を書くことができる。

CEFRのC2～B1レベルの例示的能力記述文と中検の指定作文のあり方を対照的に示すと以下になるよう¹⁰。

CERR		中検	
C2	明瞭な、流暢な文章を適切な文体で書くことができる。効果的な論理構造で事情を説明し、その重要点を読み手に気づかせ、記憶にとどめさせるように、複雑な内容の手紙、レポート、記事を書くことができる。仕事や文学作品の概要や評を書くことができる。	1 級	語学以外の見地も必要な高度な評論タイプの指定作文／求められる長い字数相応の漢字力・語彙力・文法または熟練した構文の知識が必要／「高いレベルで中国語を駆使しうる能力の保証」の認定基準に相応しい(不足) 複雑で効果的な論理構成で書くことになっていない／作品の要約と批評ではない／適切な文体を選択しない
		準1 級	指定作文は説明タイプと評論タイプが均等に配分する／易しい個人的な内容ではなく、社会との関わりへの関心が求められる高度なテーマ／推敲の余裕がないため、作文内容構成

C1	適当な長さでいくつかの視点を示して、明瞭な構成で自己表現ができる。自分が重要だと思う点を強調しながら、手紙やエッセイ、レポートで複雑な主題を扱うことができる。読者を念頭に置いて適切な文体を選択できる。	に相当な基礎知識が必要だ／字数が少ない分、漢字のミスや文法の間違い等による減点の可能性が少ない／「実務に即従事しうる能力の保証」という認定基準に相応しい (不足) C2 複雑で効果的な論理構成で書くほど字数がない／作品の要約と批評ではない／適切な文体を選択しない C1 構成のしっかりした文章を書くほどの字数がない／適切な文体を選択しない
		2 級 説明タイプで個人の周辺のことについての指定作文／推敲の余裕がないため、作文内容構成をしっかりとした基礎知識でもってスピーディに行う必要だ／「実務能力の基礎づくり完成の保証」という中国語の基礎力作りの認定基準に相応しい (不足) C1 構成のしっかりした文章を書くほどの字数がない／適切な文体を選択しない／自分の意見を言うテーマではない／指定テーマの内容と字数制限のため、複雑なテーマではない B2 既成見解に対して意見を述べる内容になっていない／字数制限のため、既成見解に対して意見を述べるテーマが指定できない
B2	興味関心のある分野内なら、幅広くいろいろな話題について、明瞭で詳細な説明文を書くことができる。エッセイやレポートで情報を伝え、一定の視点に対する支持や反対の理由を書くことができる。手紙の中で、事件や体験について自分にとっての意義を中心に書くことができる。	3 級
B1	身近で個人的に関心のある話題について、つながりのあるテキストを書くことができる。私信で経験や印象を書くことができる。	

上の表にある「(不足)」の部分は、指定作文が対応しきれない部分である。その大きな原因は設定字数が短く、C E F R が求める論理構造的にしっかりとした文章で、意見を述べたり、情報を伝えたりするような指定作文ができないことにある。また同じ理由で、指定作文が万人向けの自己表出

（自分や社会現象の説明・自分の意見の陳述）類のテーマしか課することができないため、文体を選択する余地もないことからそういう能力を測ることもできない。

7 結び

中検では、試験問題の全体のレベル設定及び問題の性質、内容と C E F R の共通参照レベルとの整合性から両者の対応・接続の相関関係が認定されている。以上、本論は中検が共通参照レベル（自己評価表）に提示される「書くこと」の力に対応・接続すべく 2020 年 6 月より導入された指定作文の中検試験問題としてのあり方及び C F E R との相関関係を見てきた。その結果、指定作文に限って言えば、それぞれの級の中検の認定基準に見合う試験問題だが、示される C E F R との関係に齟齬があることが明らかになった。試験問題としては、1 級の指定作文は C1、準 1 級の指定作文は B2、2 級の指定作文は B1 に相当するレベルを測るものとして機能していると考えられる。その直接的な原因が字数制限にあると思われるが、C E F R が考えている「熟達した」または「自立した」言語使用者のレベルは、さまざまな言語情報から有用なものを整理したり、また自分から複雑なテーマを組み立てたりしてコミュニケーションを行うというものである。指定作文が決める、30 字（2 級の最小字数）～ 120 字（1 級の最大字数）では C E F R が提示している C2 ～ B2 レベルを測る試験問題として機能することが難しい。

指定作文が字数制限によって C E F R C2 ～ B2 レベルを測る試験問題として機能するのが難しいということの背後に大きなポイントが潜んでいると考えられる。そもそも C E F R は言語知識の把握量、把握正確性などといった視点ではなく、実際のコミュニケーションにおいて、どのような課題、どのようなアプローチが可能かという発想によって共通参照レベ

ルを提示しているものであるから、そういう行動中心的で語用的なレベルを測るためには、やはりコミュニケーションの場合、それ相当の状況を設定する必要があるであろう。CEFR の設計思想と、言語知識の把握量、把握正確性を中心に測る検定試験を含む日本で一般的に行われる多くの試験とは大きな乖離があるのである。

もう少し CEFR が成り立つプロセスに立ち戻って確認すると、CEFR は単なる語学学習の到達する目標の指針ではなく、さまざまな言語の教育と学習の現場において、共通に参照できる目安である。この目安には言語を実際に使用してコミュニケーションするという行動中心的な思想が貫いており、その導入は、単なる試験ではなく、教科書、シラバス、教授法などと合わせて行うべきであり、その一環としてのテストや試験も上に見るような問題がなくなっていくのであろう。

しかし、教育へのサポートはするが、一応教育現場と一線を置き、教えるというプロセスを持たない検定試験は CEFR への対応・接続が可能であろうか。この問いを言い換えると、指定作文が C2 ～ B2 レベルを測る試験問題として機能することが可能であろうか。中検の他の形式の試験問題との整合性などさまざまな側面を考えなければならないが、たとえば、いま実施しているように指定テーマと指定語句をもとに作文を課すのではなく、同じ試験問題のセットにある長文問題を分析したりまとめたりした上で、何らかのテーマで作文するといった方向へ変更すれば、ある程度少ない字数でも CEFR が提示する「複雑な内容への理解」という側面を測ることが可能となり、構造または文体に対しても要求を指定して作文を構築する能力をも測ることができ、かなり C2 ～ B2 レベルを測る役割が果たせる問題に近づくのではないかと考えられることから、答えは Yes である。

文献

- Council of Europe. (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. <<https://rm.coe.int/1680459f97> (2024.3.5)>
- 吉島茂・大橋理枝他訳編 (2004)『外国語教育Ⅱ—外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠—』, 東京: 朝日出版社.
- 吉島茂・大橋理枝他訳編 (2014)『外国語教育Ⅱ [追補版]—外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠—』, 東京: 朝日出版社.
- 奥村三奈子・櫻井直子・鈴木裕子編 (2016)『日本語教師のための C E F R』, 東京: くろしお出版.
- Council of Europe. (2020) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment - Companion volume*. <<https://rm.coe.int/common-european-framework-of-reference-for-languages-learning-teaching/16809ea0d4> (2024.3.5)>
- 湯浅博章 (2021) 日本の大学における第 2 外国語教育と C E F R —「実用性」から考える意義と課題—『教育開発ジャーナル』第 11 号, 神戸: 神戸学院大学.
- 櫻井直子・鈴木裕子編 (2024)『C E F R—CV とことばの教育』, 東京: くろしお出版.

注

- 1 日本中国語検定協会<<http://www.chuken.gr.jp> (2024.3.5)>が実施する中国語検定試験.
- 2 本論の C E F R への言及は, Council of Europe. (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. <<https://rm.coe.int/1680459f97> (2024.3.5)>による.
- 3 <https://www.chuken.gr.jp/tcp/outline.html> (2024.3.5).
- 4 1 級 https://www.chuken.gr.jp/tcp/test/110/T110_1A1.pdf (2024.3.5).
準 1 級 https://www.chuken.gr.jp/tcp/test/110/T110_1J1.pdf (2024.3.5).
2 級 https://www.chuken.gr.jp/tcp/test/110/T110_2A1.pdf (2024.3.5).
- 5 104 回解答 https://www.chuken.gr.jp/tcp/test/104/A104_1A1.pdf (2024.3.5).
107 回解答 https://www.chuken.gr.jp/tcp/test/107/A107_1A1.pdf (2024.3.5).
- 6 C E F R ではコミュニケーションのテーマとして「1) 個人に関する事柄, 2) 家と家庭, 環境, 3) 日常生活, 4) 自由時間, 娯楽, 5) 旅行, 6) 他人との関係, 7) 健康と身体管理, 8) 教育, 9) 買い物, 10) 食べ物と飲み物, 11) サービス,

12) 場所, 13) 言語, 14) 天気」が提示されており, それぞれのテーマの下に下位カテゴリーが設定できるとされている。本論は, 中検各級の難易度を見る視点から指定作文のテーマを分類する際に特に C E F R の分類に準拠しない。

7 <https://www.chuken.gr.jp/tcp/grade.html> (2024.3.5).

8 <https://www.chuken.gr.jp/tcp/outline.html> (2024.3.5).

9 訳は吉島茂・大橋理枝他訳編 (2014), p.29 より。

10 この表は中検 HP 公表の対応関係に従う。 <https://www.chuken.gr.jp/tcp/outline.html> (2024.3.5)。

本研究の一部は、2023 年度中京大学内外研究員制度（その他の研究員）の支援を受けたものである。